

(第十六章)

『根本中論』の解説、ブッダパーリタ。第六卷。

本性が有ることの理由を否定する>束縛と解脱が本性として有ることを否定する>本義>章の著述を説く>輪廻と涅槃が本性として成立したことを否定する> [輪廻が本性として成立したことを否定する]

ここに言う。「事物や無事物であるとする見ることが無いところに、何ものにおいても輪廻と涅槃や、束縛と解脱は不合理であるとするそれが、如何様に真如となろうか。事物や無事物と見ることが有れば、それら一切が合理となるので、事物や無事物であるとする見ること自体が、真如を見るのである。」

輪廻が本性として成立したことを否定する>取られものである蘊が輪廻することを否定する>

[恒常が輪廻することを否定する]

説く。何かを事物や無事物と見ることにおいて、それら一切は不合理である。

もし「如何様に」といえば。

ここで、事物であると言う者（実在論者）達は『諸事物である』と尽く考えるが、諸行や有情を『事物である』と尽く分別するのか？と問えば、それらを事物であると尽く分別すれば、恒常か無常になる背理となるだろう。そこで、

もし、『行が輪廻する』といえば、
それらは恒常であれば輪廻せず、
無常であろうと、輪廻するとならない。
有情についても、この次第は等しい。 1

そこでもし、先ず諸行が輪廻すると尽く考察すれば、それは不合理である。何故かといえば、このように、

「それらは恒常であれば輪廻せず、無常であろうとも、輪廻するとならない。」

先ず、諸行が恒常であれば輪廻しない。何故かといえば、恒常は変化しない故である。ここで、心相続¹の流れがそれやそれへ生じ滅すものを「輪廻」というならば、恒常で変化しない諸行が、起こり壊れる主体そのものであるとは不合理なので、それ故に諸行が恒常であれば輪廻しない。

¹ 心相続：心の継続。

取られものである蘊が輪廻することを否定する> [無常が輪廻することを否定する]

諸事物は無常であろうとも輪廻しない。このように、ここで、ただ滅すだけの諸行も他に生じないので、それ故に、永久に滅した諸物に輪廻は不合理である。それ故に、諸行は無常であるとしても輪廻しない。そのように先ず、行という名を持つ恒常である事物と、無常である諸事物が輪廻することは不合理である。

輪廻が本性として成立したことを否定する> 取る者である有情が輪廻することを否定する>

[蘊より別本質の有情が輪廻することを否定する]

そこでこう、『諸行は輪廻しないが、有情は輪廻する』と思えば。

それに対して説こう。

「有情についても、この次第は等しい。」

諸行においても輪廻が不合理であると示した次第そのものが、有情についても等しい。このように、有情も恒常か無常である何が輪廻するとなるのか？と問えば、それ故に、それについても、恒常において、輪廻は不合理である。(何故ならば) 変化しない故である。無常においても輪廻は不合理である。(何故ならば) 結び付く必要無く、永久に滅した故である。

取る者である有情が輪廻することを否定する> [蘊より自とも他とも述べられないプトガラが輪廻することを否定する]

ここで言う。「その論法は、有情が輪廻することについて等しくはない。このように有情は、諸々の蘊と處と界より、そのもの(自性)や他性であると述べられるものではなく、まさしく恒常や無常であるとも述べられるものではないので、それ故に、恒常と無常の過失と離れた有情が輪廻するのである。」

説く。

もし、プトガラが輪廻するといえは、

諸々の蘊と處と界に、

それを五つの様相で探して、

無ければ、何が輪廻するとなろうか。 2

もしこのように、プトガラが輪廻すると思えば、それは甚だしく、非常に不合理である。何故かといえは、何故ならば蘊と處と界に、それを五つの様相で探したならば無い故であり、君の好む、作り物の草食動物のように尽く考察されたものである必要性の無いプトガラは、蘊と處と界において五つの様相によ

って探したけれど認識されるものとして無く、五様相で探したけれど認識されるものとして無いそれらを、他の何が、有ると捉えようか。それ故に、それは無いのみである。それが無ければ、何が輪廻を廻るか、それを言いたまえ。

また他にも、

近取より近取へと

輪廻するならば、有²は無くなるだろう。

有が無く、近取が無ければ、

それは何が輪廻するとなろうか 3

もし、「プトガラが輪廻する。」と考えたならば、そう見れば、それが近取より他の近取へと輪廻するけれど、有は無くなるだろう。何故かといえば、このように、近取に従って有と名付けられるのであるが、その近取であるそれも、(近取と)近取の中間に入ることが無ければ、何によって有と名付けられようか。それ故に、そこに近取は無い故に、有が無い背理となるだろう。名称が付けられることは無く、明らかにするものが無く、近取が無く、有が無いそれは何であり、如何なる近取へ輪廻するとなろうか。得ていないその時に、近取そのものも無い。

言う。「それは中有の有として、近取と共にあるのみなので、それ故に、近取と共にあるのみによって他の有を得るので、有が無くなるとはならない。」

説く。この近取を捨て去り、中有の近取へ移行することや、中有の近取も捨て去り、それより他の近取へ移行するものにおいても、その間の時間に有が無いことと、近取が無くなること自体はそのまま留まり続けるので、それ故に、有情も輪廻するとは不合理である。

輪廻と涅槃が本性として成立したことを否定する > [涅槃が本性として成立したことを否定する]

ここで、

行が苦しみを超越するとは、

如何様にも不合理である。

諸行が苦しみを超越する(涅槃を得る)とは、如何様にも不合理である。何故かといえば、恒常か無常である背理となる故である。

² 有：輪廻での生。

そこで先ず、もし、諸行が恒常であると尽く考察されれば、恒常にならない諸行において涅槃を得るので、如何なる違いを為すとなろうか。もし為すならば、変化する故に無常となるだろう。

もし諸行が無常であるならば、そう見るとしても壊の主体である故に、滅して無いものにとって涅槃とは何のものであるとなろうか。そう見るので諸行が苦しみを超越する（涅槃へ赴く）ことも不合理である。

そこでこう、『有情が苦しみを超越する』と思えば。

それに述べよう。

有情が苦しみを超越するとは、
如何様にも合理とはならない。 4

有情が苦しみを超越するとも、如何様にも合理とはならない。何故かといえ、まさしく恒常か無常である背理となる故である。

そこで先ず、もし有情が恒常となれば、常に変化しない諸物において、涅槃を得ることによって何も為されることは無く、多くの過失ともなるだろう。

もし、有情が無常となれば、そう見るとしても、結び付く必要無く滅した無常において、涅槃を得たことによっても何をしようか。涅槃は何の（所有する）ものとなろうか。

そこでこう、『まさしく恒常か無常であると述べられるものではない有情が、苦しみを超越する（涅槃を得る）と合理である』と思えば。

それも不可である。何故かといえ、恒常か無常そのものであると述べられるものでないものは、近取とまさしく共にある場合には合理であるが、近取が無いものにおいては不合理である。近取の無い有情が苦しみを超越せられるものであれば、近取の無いただそれだけのものが、何故に恒常とも無常とも述べられる対象ではないとなろうか。

そこでこう、『近取が無いものは、有性や無性であると述べられるものではない。』と思えば。

それに説こう。有性や無性であると述べられる対象でないそれを、如何様に「苦しみを超越した（涅槃を得た）。」と述べるのか。

言う。「近取の無いものであるそれは、有性や無性であると述べられる対象ではなくなる。斯くも近取と共に有るものが存在すれば、それ自体（自性）か他性であると述べられるものではないが如くである。」

説く。近取無く、明らかにするものが無いものについて、有性（まさしく有る）と何によって知ろうか？もし有るならば、「某によって、それが有る」と知らされるもの自体が、その近取であるので、近取と共にあるそれにおいては、解脱とはまさしく不合理である。

そこでこう、『〈近取が無いものは、有性であると述べられるものではない。〉という時、〈何によってそれが有ると知ろうか？〉という対論が、如何様に適当なのか。』と思えば。

説く。「述べられる対象」も他であり、「様相として知られる対象」も他であるので、それ故に「如何様に知ろうか？」と言った。しかし「何と述べようか？」とは言っていない。存在しない兎の角について、君の「述べられる対象」や「述べられる対象ではない（不可説）」という思惟は無いので、それ故に、心がそれを有ると捉えて言葉の過失を斥ける為に「述べられる対象ではない（不可説である）。」と言うのか？もし君の心によっても、それがまさしく有るか、無いかと確かでなければ、何故「述べられる対象ではない。」と言うのか。真正直に「尽く知られる対象ではない。」と述べられるものの類であり、阿闍梨聖提婆も、

「解脱において、もし我が有るならば恒常に、もし無ければ無常となる。

不可説の士夫も、賢者によって知られる対象ではないのではない。」

と説かれた。

そう見るので、有情も、如何様にも苦しみを超越する（涅槃を得る）とは不合理である。

章の著述を説く > 束縛と解脱が本性として成立したことを否定する >

[束縛と解脱が本性として有ることを共通に否定する]

生壊の主体である諸行は、
束縛せず、解脱するとならない。

諸行とは、束縛するとも不合理であるが、解脱も不合理である。何故かといえば、このように、確実に留まらない、刹那毎に生じ自然に滅す生壊の主体である諸行は、如何様であろうとも束縛する、解脱するとは不合理である故であ

る。

言う。「行の継続に、束縛することと解脱が有る。」

説く。もし、「行の継続」という何らかの事物が有るとなれば、君が主張するように束縛するか？解脱するとなるか？とも問われようが、生滅の因そのものである行を「継続」という時、それにおいて、何が束縛し何が解脱するとなるうか。もし継続である一事物が有るとなっても、そう見ても、行である故と、生と壊の主体である故と、確実に留まらない故に、それにおいて束縛と解脱が合理になると、何処でなろうか。

そこでこう、『諸行は、束縛するともならず解脱するともならないが、有情が束縛し、解脱するとなるだろう。』と思えば。

それに説こう。

先の如く有情も、
束縛せず、解脱するとならない。 5

有情も束縛するともならず、解脱するとならない。もし如何様にといえば、「先の如く」であり、斯くも先に、恒常の有情においても輪廻と涅槃は不合理であるが、無常においても不合理であると示された如く、ここでも有情は恒常にならないとしても、束縛するとは不合理であり、解脱も不合理である。もし、束縛し、解脱するとなれば、変化する故に無常になるだろう。

無常の有情において、滅す主体であり確実に留まらないものも、束縛され、解脱させられる対象にはできない。このように滅して無いものにおいて、何が束縛され、解脱させられる対象として有ろうか。

束縛と解脱が本性として成立したことを否定する>それぞれに否定する> [束縛が本性として有ることを否定する]

ここで言う。「有情の近取であるものは『束縛するもの』というが、近取が永久に寂滅したそれを「解脱」といい、有情も、まさしく恒常か無常であると述べられるものではないので、それ故に、恒常と無常の過失と離れた有情に、束縛と解脱が合理である。

説く。

もし、近取が束縛するならば、
近取と共にあるものは束縛するとならない。

もし、近取が束縛するものであれば、そう見れば先ず、近取と共にある有情は、束縛するとならない。何故かといえば、既に束縛されたのみである故であり、このように既に束縛されたものにも、束縛される何が必要か。

そこでこう『近取の無いもののみが、束縛するとなる。』と思えば。

それに説こう。

近取の無いものは束縛せず、

近取が無くとも、それを束縛するとは不合理である。このようにも、何か意味付けられるものとして無い、名付けられるものとして無い、明らかにするものが無い、近取の無いものが、如何様に有るとなろうか。無いそれを如何様に近取が束縛するとなろうか。それ故に、近取が無い有情も、近取が束縛するとは不合理である。ならばここで、君の有情を、

如何なる場合に束縛するとなろうか。 6

を、ここで言いたまえ。

ここで言う。「束縛するものである近取は、先ず明らかに有り、これが束縛を為すので、『束縛するもの』という。そのように束縛するものが有る故に、それによって束縛される対象も、有るのみである。」

説く。

もし、束縛された以前に、
束縛するものが有れば、束縛するに至る。
それも無く、・・・

もし、その束縛（されたもの）より以前に、束縛するものである近取が有るとなれば、君が主張するように近取が束縛するので、束縛するものとなるに至るが、束縛（されたもの）の以前にそれも無い。このように、近く取られてい

ないものが、如何様に近取であるとなろうか。束縛（されたもの）の以前に無いものによって、如何様に束縛するとなろうか。そう見るので近取も束縛するものではない。

・・・・・・・・残りは、
過ぎた・過ぎていない・歩むによって示した。 7

束縛するものが不合理であることの残りであるものは、過ぎた・過ぎていない・歩むによって示されたと理解すべきであり、斯くも、過ぎた（道）に行く（行為）が無いことと、過ぎていない（道）にも無く、歩む（道）にも無いが如く、束縛されたものも束縛せず、束縛されていないものも束縛せず、束縛しつつあるものも束縛しない。斯くも、過ぎた（道）において行く行為の開始は不合理であり、過ぎていない（道）においても不合理であり、歩む（道）においても不合理であるが如く、束縛されたものにおいて束縛の開始は不合理であり、束縛されていないものにおいても不合理であり、束縛しつつあるものにおいても不合理である。

それぞれに否定する> [解脱が本性として有ることを否定する]

ここで言う。「先ず解脱とは、世尊によって示されたこととして一衆生を尽く解脱させる為に如来は世間へと現れるので、それ故に、先ず解脱は有る。束縛されていないものにも解脱は無いので、束縛（されたもの）も有るのみである。」

説く。もし解脱そのものが合理であれば、束縛も有るだろうかと疑われようが、解脱が不合理であるので、束縛が合理であると、何処でなろうか。如何様にといえば、何故ならば、

先ず、束縛されたものは解放せず、

ここで先ず、束縛されたのであるものは、解放しない。何故かといえば、このように、束縛された所自体に存在する束縛されたものが、如何様に解放するに合理となろうか。もし束縛されたもの自体が解放するとなれば、そう見れば、何も解放されていないとならないので、それは主張しない。そう見るので、先ず束縛されたものは解放しない。

言う。「束縛するものと離れたものである束縛されたものが、解放されたのだ。」

説く。それについても、まさしくそれであり、束縛されたものにおいて、束縛するものと離れたとは不合理である。(何故ならば) 束縛されたのみである故である。

言う。「ならば、束縛するものと離れたことを解放という。」

説く。

束縛されていないものも、解放するとならない。

このように、束縛するものと離れたものは、束縛されていないのみであり、束縛されていないものは、まさしく解放されたものであるので、それにおいて再び解放されるとなると何をしようか。然れば、束縛されていないものも解放されるとならない。

言う。「束縛されたものは解放し、このように『束縛されたものが解放されるとなるだろう。』というそれは、世間に公認されるのである。」

説く。「それは、世間に公認されるのである。」と言ったことは、善く言った。このように、何故ならば世間に公認されたのである故に、勝義³を思惟するに当たるとはならない。如何様にといえば、斯くも、

束縛されたものが解放されつつあるとなれば、
束縛と解放が同一時となる。 8

もし、「束縛されたものは解放する」となれば、そのように束縛するものを具えることによって「束縛されたもの」といい、解脱であることを具えるので「解放されたもの」という、束縛と解脱二つが同一時である背理となり、束縛と解放という不一致の二つが一つに留まることは不合理であるので、それ故に「束縛されたものは解放する」というそれは、無関係(無意味)である。

章の著述を説く > [涅槃の為に努めることは無意味とする背理を斥ける]

ここで言う。「もし、そのように解脱そのものが不合理であるならば、輪廻が慄かせる者達のものである。しかし『何時か、我は近取無く、完全に苦しみを超越する(解脱を得る)となろうか。』『何時か、完全な涅槃は我がものとなる

³ 勝義：究極の意味。聖なる意味。世俗、世間に対する。

だろうか。』と思う思惟や、涅槃を得る教誨であるものや、涅槃を得る為に尽く突き動かすそれらの一切は、まさしく無意味とならないか？」

説く。正しい方法でないものによって追求することや、教誨を示すことや、努めることが、まさしく無意味になることは疑いない。このように『我は近取無く、完全に涅槃をえよう。』と思うことや、『涅槃は我がものとなる。』と思う者達が、如何様に涅槃である（苦しみより超越する）となろうか。かの時、

我は、取ること無く苦しみを超えるだろう。
涅槃よ、我がものになれと、
それら執する者達の、
近取は善く経過したものではない。 9

ここで、近取を永久に寂滅したものであるそれが「涅槃」とすれば、一切の近取の根本は我と我所（我がもの）に対するとらわれであるので、『我は近取無く、完全な涅槃を得よう。』『近取の無い完全な涅槃が、我がものとなれ。』と誤って思い込んだ者達は、我と我所に対する執が尽く保持される一確実に留まるものである。従って、それ故に、それらの我と我所に対する執そのものが、善く経過していない近取なのである。近取と共にあるものに、解脱が合理であると何処でなろうか。近取無く、完全な涅槃となるだろうそれは何であり、完全な涅槃は何の（所有する）ものであるとなろうか。それら一切は、その渴愛と愚痴によって生じさせられたのである。

ここで言う。「先ず、輪廻と涅槃は、また有るのであり、それらも何かのみの（所有する）ものであるが、何も無いものの（所有する）ものでもないので、輪廻者と涅槃者も有り、吾輩にとってはそれだけで良い。」

説く。何？君は空っぽの器を守るのか？君は不合理な束縛と解脱に、輪廻と涅槃が有ると主張している。

何かに、涅槃が生じさせられることは無い。
輪廻を斥けたことも、有るのではない。
それに、輪廻とは何ものであるか。
涅槃も何が考察されようか。 10

このように、輪廻であるものに束縛された諸々の有情と行が、輪廻より斥け

捨て去られる一涅槃へと生じさせられ、そこに入り込ませない処を、「輪廻」という何であると考察せられるか。それより何も排斥されていないけれど、それに何も生じさせられるとしていないそれを「涅槃」というが、それも何であると考察せられるか。

あるいはこれは他の意味であり、このように、それに輪廻を完全に滅尽させる為と、何らかの涅槃を得る為に努めを具えても、輪廻が斥けられ捨て去られるとはしないが、涅槃も、生じさせられ向上させられることをしない。清浄ではない分別とまさしく離れたのみとなるそれにおいて、「輪廻」という何が考察され、「涅槃」とも何が説明されようか。

そう見るので、事物と無事物であると見る者達は、恒常・断滅と見る見解である背理となる故に、それらに輪廻と涅槃や、束縛と解脱等は不合理である。しかし、縁起生を語る者自身には、輪廻と涅槃、束縛と解脱というものが成立する。

本義> [章の名を示す]

「束縛と解脱を考察する」という第十六章である。